きつねとたぬきの潜在的印象

塚 本 真 紀

1. はじめに

きつねやたぬきは昔話や童話によく登場する動物であり、子どもの頃から、それらが登場する物語に親しんできた人は多いであろう。古くは山神としての一面を示していたとされるきつねと、異域の神・妖怪としての特性を示していたとされるたぬきとで、その特性を分ける立場もあるが（松谷、1995)、どちらも、「化けて人間をだます動物」として描かれるという点では共通している。また、きつねもたぬきも、北海道、本州、四国、九州国内のほぼ全地域に分布しており、2000 年代においても生息区画率の増加が確認されている身近な哺乳類である（自然環境研究センター、2010 年)。

一方で全世界的な分布においては、きつねとたぬきには大きな違いがある。たぬきは日本や中国などの東アジアにのみ自然分布する珍しい動物であり、きつねは世界各国に広く分布する動物である。そのため、きつねが登場する物語には、東アジア以外の文化圏から紹介・翻訳された作品も多く含まれ、また、その影響を受けて日本国内で新たに創作された作品も数多く存在している。

本稿では、きつねやたぬきが登場する様々な作品に幼少期からふれてきたであろう大学生を対象に、作品の読解経験およびきつねやたぬきに対する印象を調査した結果を報告する。通常の印象評価だけではなく、自分では意識することができない潜在的なレベルでの印象評価にも焦点をあてた検討を試みる。

2.「きつねやたぬきが出てくる話」としてどのようなものがあげられるか

26 名の大学生（18 ～ 21 歳）を対象に記述式の調査を行い、「きつねやた

ぬきが出てくる話として思いつくもの」をできるだけたくさんあげてもらった。思いついた話についてあらすじや概要を記述してもらい、その記述内容をもとに調査者が情報検索を行い作品のタイトルを推定した。対象者に確認をとり、作品が同定できたものをすべてリストアップした。表 1 に 26 名があげた全話のタイトルとそのジャンルを示している。

きつねが登場する話として多くの回答者があげていたのが、新見南吉の『ごんぎつね』、同じく新見南吉の『手袋を買いに』であり、教科書に掲載されていたり絵本で読んだりしたことがあるという回答であった。たぬきが登場する話として多くの回答者があげていたのが、昔話『かちかち山』、スタジオジブリ制作の『平成狸合戦ぽんぽこ』、昔話『ぶんぶく茶釜』であった。たぬきが登場する話としてあげられたものはそれほどバリエーションが多くなく、すべて日本の昔話やそれらをモチーフにした日本の作者による作品であった。それに対して、きつねが登場する話としてあげられたものには、ヨーロッパで語り継がれてきた寓話を翻訳したイソップ童話、アメリカで作成されたアニメーション等が含まれている。また、昔話をモチーフとしたものではなく、現代作家によるきつねを主人公とする創作絵本や児童書もあげられていた。この他に、きつねとたぬきの両方が登場する話も 2 つあげられていた。

3. きつねとたぬきの顕在的印象

このように、幼少期から作品を通して慣れ親しんできたきつねやたぬきは、どのような印象でとらえられているのであろうか。ここでは、十分に時間をかけて自分の考えを意識的に処理することによって得られたきつねやたぬきの顕在的印象を分析する。単純に言えば質問紙調査に回答として示された反応の分析であるが、後に述べる潜在的印象と対照して、顕在的印象という言葉で表現することにする。

「きつねやたぬきが出てくる話」をあげてもらった 26 名の大学生に対して同時に行った質問紙調査の結果である。質問は、きつねとたぬきを比べて、①好きなのはどちらですか、②友達になるならどちらを選びますか、③物語の主人公にするならどちらを選びますか、の 3 点であった。併せて回答の理由を自由記述してもらった。図 1 に 3 つの質問についての回答割合を示した。

表１「きつねやたぬきが登場する話」として記述されたもの

タイトル	ジャンル	回答者数
きつねが登場する話		
ごんぎつね	児童文学（新見南吉作）	22
手袋を買いに	児童文学（新見南吉作）	12
きつねの嫁入り	日本の伝承	3
かいけつゾロリ	児童書シリーズ（原ゆたか作）	2
つるときつね	イソップ童話	2
きつねと猟犬	ディスニー制作の長編アニメーション	1
きつねのお客様	絵本（あまんきみこ文、二俣英五郎絵）	1
きつねの窓	児童文学（安房直子作）	1
きつねをつれてむらまつり	絵本（こわせたまみ文、二俣英五郎絵）	1
九尾の狐	中国の伝承	1
ぎんぎつね	漫画作品（落合さより作）	1
子ぎつねヘレン	日本映画	1
すっぱいぶどう	イソップ童話	1
つりばしゆらゆら	絵本（もりやまみやこ文、つちだよしはる絵）	1
ともだちや	絵本（内田麟太郎文、降矢なな絵）	1
虎の威を借る狐	中国の故事	1
ロビンフッド	ディスニー制作のアニメーション（主人公をきつねにしてアレンジしている）	1
たぬきが登場する話		
かちかち山	日本の昔話	19
平成狸合戦ぽんぽこ	スタジオジブリ制作の劇場アニメーション	14
ぶんぶく茶釜	日本の昔話	9
阿波の狸合戦	江戸時代に阿波国で起きた狸の大戦争の伝説	1
有頂天家族	小説（森見登美彦作）	1
證誠寺の狸ばやし	日本の昔話	1
夜泣きうどん	日本の昔話	1
きつねとたぬきが登場する話		
きつねとたぬきの化け比べ	日本の昔話	1
こぎつねコンとこだぬきポン	絵本（松野正子文、二俣英五郎絵）	1

「好きなのは」については有意な回答の偏りが認められなかったが、その他の質問については「友達になるならたぬき」、「物語の主人公にするならきつね」、という有意な回答の偏りが認められた。「友達になるならたぬき」という回答をした理由として、「きつねは最後に裏切りそうだから」「きつねはずるそうだから」など、きつねに対するネガティブな印象が多く記述されていた。「物語の主人公にするならきつね」を選択した理由としては「きつねを主人公とする話が多いから」「複雑なキャラクター設定ができておもしろいストーリー展開ができそうだから」などがあげられていた。全般に回答理由の自由記述欄にはきつねに関連する記述が多く、たぬきに比べてきつねについての意識的処理が行われやすい状態にあることが示唆された。

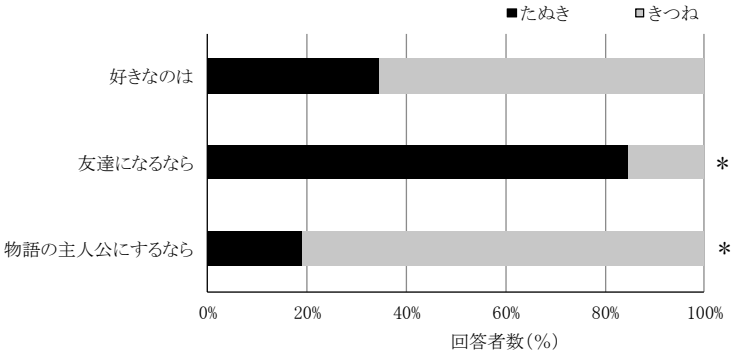

図１ きつねとたぬきの顕在的評価（n ＝ 26）

（＊回答者の割合に統計的に有意な偏りが認められた）

4. きつねとたぬきの潜在的印象

顕在的印象は「友達にするならたぬき、きつねはずるいから」「物語の主人公にするならきつね、物語がつくりやすいから」であったが、潜在的印象についてはどうであろうか？ここではきつねやたぬきに対する非意図的で自動的な印象評価である潜在的印象を検討する。

潜在（implicit）とは、人が意識したり意図的に使ったりすることができない、という意味で認知心理学や社会心理学の領域で用いられている表現である。潜在的印象とは、人々がこれまでの経験から知らず知らずのうちに形成

し、自分で意識することができないが所有している印象であり、日常生活における様々な行動に影響を与えると考えられている。顕在（explicit）的な印象の分析からは、きつねについての意識的処理がより多く行われている状態であることが推測されたが、潜在的印象についてもきつねとたぬきで違いがみられるのであろうか。

潜在的印象は Greenwald, McGhee, & Schwartz（1998）によって開発された、潜在連合テスト（Implicit Association Test、以下 IAT と表記）によって測定することができる。IAT は概念間の潜在的な連合を測定する手法であり、概念は常に対になって用いられる。例えば「花」に対する潜在的印象を測定する際に対になる概念として「虫」を用いる（必ずしも対立概念である必要はない)。連合の対象となる概念も「快」と「不快」など対で用いられる。「花」概念に含まれる刺激として「桜」「すみれ」「チューリップ」など花を表す単語を用い、「虫」概念に含まれる刺激として「蛾」「あり」「蜂」など虫を表す単語を用いる。「快」概念に含まれる刺激として「美しい」「きれいな」「かわいい」など快を表す単語、「不快」概念に含まれる刺激として「きたない」「いやな」「こわい」など不快を表す単語を用いる。IAT テスト対象者には画面に一つずつ呈示される単語をできるだけ速く正確に分類する課題が示される。課題は 2 種類ある。課題①は「『花』あるいは『快』を表す単語の場合は A キーを、『虫』あるいは『不快』を表す単語の場合は B キーを押す」、課題②は「『花』あるいは『不快』を表す単語の場合は A キーを、『虫』あるいは『快』を表す単語の場合は B キーを押す」というものである（単語の呈示回数や順序については標準化された一定の手順に従う)。どちらの課題についても、一定の練習試行を経ることによって正確な解答をすることが可能であるが、分析対象とするのはその反応時間（ミリ秒単位で測定）である。課題①の反応時間が課題②よりも短い場合、「花－快」「虫－不快」という連合が、「花－不快」「虫－快」という連合よりも強いため、より短時間で反応しやすかったと解釈する。

では、「たぬき－頭がよい」「きつね－頭がわるい」という連合と「たぬき－頭がわるい」「きつね－頭がよい」という連合はどちらが強いのだろうか。大学生 13 名を対象に IAT を実施し、反応時間を比較してみた。「たぬき」概念・「きつね」概念に含まれる刺激としてたぬきやきつねのイラストや写真を用

い、「頭がよい」概念に含まれる刺激としては「かしこい」「頭の回転がはやい」などの単語を、「頭がわるい」概念に含まれる刺激としては「にぶい」「機転がきかない」などの単語を用いた。対象者には画面に一つずつ呈示されるイラスト・写真または単語をキー反応によってできるだけ速く正確に分類する課題が示される。

図 2 に「たぬきー頭がよい」「きつねー頭がわるい」という連合（同一「　」内の概念に含まれる刺激については同じキーに反応する。連合については以下同じ。）と「たぬきー頭がわるい」「きつねー頭がよい」という連合についての反応時間を示した。反応時間に統計的に有意な差が認められ、「たぬきー頭がわるい」「きつねー頭がよい」という連合のほうが、「たぬきー頭がよい」「きつねー頭がわるい」という連合に比べて反応時間が有意に短くより短時間で反応しやすい、すなわち、連合強度が強いことが明らかになった。

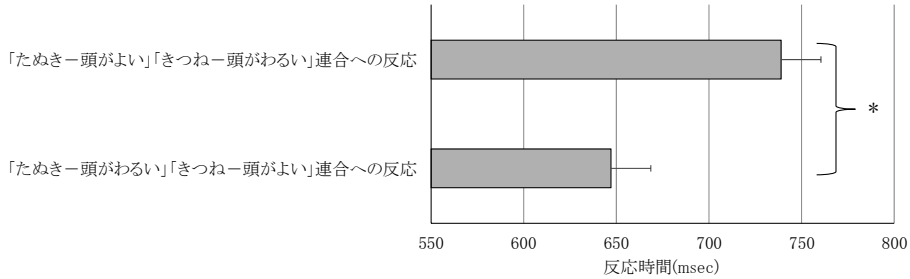

図 2「頭のよさ」についての潜在連合テストの反応時間（$n = 13$）

（エラーバーは標準誤差を示す。＊反応時間に統計的に有意な差が認められた。）

同様に、「たぬきー親しみやすい」「きつねー親しみにくい」という連合と、「たぬきー親しみにくい」「きつねー親しみやすい」という連合についてもIAT の手順に基づき反応時間を測定した。「親しみやすい」概念に含まれる刺激としては「やさしい」「あたたかみのある」などの単語を、「親しみにくい」概念に含まれる刺激としては「冷たい」「近寄りがたい」などの単語を用いた。図 3 に示したように、連合間の反応時間に有意な差はなく、親しみやすさとの連合強度にはたぬきときつねによる違いは認められないことが明らかになった。

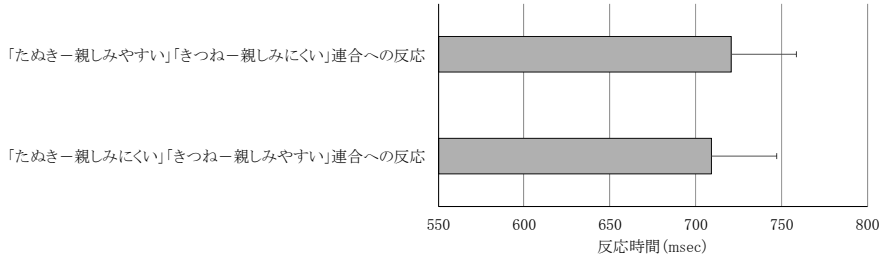

図 3「親しみやすさ」についての潜在連合テストの反応時間（$n = 13$）
（エラーバーは標準誤差を示す。）

以上 IAT の結果より、「きつねー頭がよい」「たぬきー頭がわるい」という連合は「たぬきー頭がよい」「きつねー頭がわるい」という連合に比べて連合強度が強く、潜在的レベルでは「きつねはたぬきより頭がよい」という印象でとらえられていることが明らかになった。親しみやすさについては潜在的印象の違いは認められなかった。

5. 顕在的印象と潜在的印象の違いをどう考えるか

親しみやすさについて、潜在的なレベルではきつねとたぬきの印象に違いが認められなかったが、顕在的なレベルでは「友達にするならたぬき、きつねはずるいから」と評価されていた。国内外のさまざまな作品に触れた影響を受けて豊かになったきつねへの意識的処理が、潜在的なレベルにまで浸透し、「きつねは頭がよい」という潜在的印象を形成している可能性が考えられる。対比されて扱われることの多いたぬきは、主人公として取り扱われる作品のバリエーションが多くないために存在感が薄く、意識的処理の対象になることも少ないのかもしれない。その分、きつねのように「ずるさ」を意識されることもないが、物語の主人公として位置づけにくい印象をもたれているようである。

6. おわりに

今回の調査対象者からもきつねとたぬきの両方が登場する話が 2 つあげられていたが（表 1 参照）、それらの話には、両者がライバルとして競い合っ

たり友達になろうとして苦労したりする過程が描かれている。日本の昔話『きつねとたぬきの化け比べ』では、威張っていたきつねが化け比べでたぬきに負けて泣き出す話があったり、化け比べではかなわないと判断したたぬきが知恵を絞ってきつねをだます話があったり、やはり最後にはきつねがたぬきを負かす話があったりと、きつねとたぬきが相互作用する場合にはその関係性の調整にかなり苦労している様子である。今回の調査から、人間の頭の中の世界では「きつねはたぬきより頭がよい」という印象が潜在的レベルにまで浸透していることが示唆された。今後もその潜在的印象を反映したり、悪用したり、あるいはくつがえしたりするたぬきやきつねが、時にはライバルになったり友達になったりしながら、作品の中でさまざまな活躍を見せてくれることであろう。

引用文献

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.

松谷みよ子、(1995)、現代民話考 11、狸・むじな、立風書房.

自然環境研究センター（編）、(2010)、自然環境保全基礎調査－日本の動物分布図集－、環境省自然環境局生物多様性センター

補記

本稿は 2013 年度尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、「尾道文学談話会」（第 10 回、2014 年 1 月 9 日開催）の内容をもとにまとめたものです。席上、さまざまなご意見を頂きましたことを感謝いたします。

―つかもと・まき　日本文学科准教授―